

特集 若者とまちづくりに ～卒業しても住み続けたいまちを

神奈川区六角橋では、六角橋自治連合会・商店街連合会と神奈川大学横浜キャンパスの学生などが結びつき、若い力とともに「卒業後も戻り住み続けたいまちを共に創っていこう」と期待を込めてまちづくり活動を重ねています。その核となるのは「まち^{かける}×学生プロジェクト」。通称「まちかけ」は27年の発足より3年を経て、さまざまな人が行き交うまちづくりの基盤、プラットフォームとして活気にあふれています。

まちかけ定例会（7月）参加の皆さん

（かける）まち×学生プロジェクトとは

- 目的・目標**
- 学生と地元住民があいさつしあえる
 - 学生たちが考えたアイデアを応援し形にできる
 - 卒業後も戻ってきたい、住み続けたいまち

核となる構成団体

まち

六角橋自治連合会
六角橋商店街連合会
地域交流活動委員会

×（かける）

横浜市六角橋地域ケアプラザ
（以下 ケアプラザ）
神奈川区社会福祉協議会
（以下 区社協）

学生

神奈川大学学生ボランティア活動支援室（以下 神大ボラ室）
グローバル イェン リープ
GLOBAL☆YEN☆LEAP（神奈川大学ボランティア部）
神奈川大学地域連携推進室
神奈川大学教育支援センター

発足の経緯と展開

step1 きっかけ

市域ではなくて、わが大学のある地元で活動したい

市域でのイベントを経験した神大ボラ室学生有志は、地元とつながりをもてるボランティア活動を探して横浜市社協ボランティアセンター（以下 ボラセン）を訪ねました。市ボラセンは大学キャンパスのある神奈川区社協ボラセンと連携して、まちと若者がつながる道筋づくりを考えていたケアプラザを紹介しました。

step2 土壌づくり

地域と学生が直接意見交換できる場づくり

ケアプラザでは、自治連合会長と神奈川大学の教員とでまちと若者をつなげようと模索していました。ここに、神奈川大学の学生が結びついたことで、「まちかけ」は本格的に動き出します。学生の発想を形にする応援をしようと、商店街連合会も呼応し、季節の祭礼など伝統的な行事が中心だったまちの交流事業に学生の若い力が発揮され、変化が現れていきました。

step3 活動の広がり

「知る・参加する・参画する」育む力を備えたネットワークへ

変化は交流事業だけにとどまりません。例えば、商店街連合会の店主たちの「認知症になったお客さんにも優しい店でありたい」という思いは、「まちかけ」を通じて、学生とともに認知症に理解ある商店街を目指していく「オレンジプロジェクト」として形になりました。地域の課題に向きあおうとする若い人材も育つまちとなり、今後多方面にわたる活動の広がりが期待されています。

写真で見るまちかけ



じんたい
第2回「神大マルシェ」(6月)

学生が地元商店に出店交渉してキャンパス内にマルシェ（市場）を開設。まちの人にはキャンパスに足を運んでもらうきっかけに、学生には通学路の商店をより身近に目指した交流・地産地消イベント。「大学への印象が変わった」とのまちの人の声も聞かれている。



ろくじんさい
第3回「六神祭」(8月)

元祖まちかけ企画である六神祭では、六角橋にちなんだ「まち×学生かるた」などの共同制作や、まちと大学サークルの活動発表を通じて、子どもから高齢者まで多世代が交流している。



※写真は昨年の様子

第3回「オレンジプロジェクト」(9月)

認知症サポーターとなった学生たちと、サポーター養成講座を経て「みまもり協力店」を掲げた六角橋商店街が協力。認知症啓発カラーのオレンジ色でまちを染め、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりを発信する。

みまもり協力店ロゴマーク（学生がデザインを考案）▶

